

增刊號

一九三〇年

第三輯 第一卷

目次

批評に就いて	永崎 貢
◇詩	三野 混
無處 女 雪 二篇 題地	押田 尾
吹雪 兄 二篇 題地	久保 田
朝雪 兄 二篇 題地	鈴木 松
夢 貧 兄 二篇 題地	鈴木 松
◇短歌	佐藤 清
雜母 憶 詠 歌	松上 村
靜母 憶 詠 歌	下倉 勢
病心 一 憶 詠 歌	松崎 富
◇俳句及隨想	大里 彌
◇想起文	吉野 四
その項の歌人群	外野 四
◇或る劇の序曲	松村 清
◇創作	佐藤 清
木馬に乗る男	松本 純
◇雜記	松本 純

一九三〇年社版



批評に就いて

永崎

貢

1. 客観的基準

ある藝術品を吾々が面と向つて批評しやうとする場合、吾々は先づ何よりもその作品の本質的なものをえり出さねばならない。さもなくばその批評はたゞ度の合はねガラスで事物を見んとすることに終り、高々それを歪曲するに止まるだらう。こゝに作品批評の客観的な基準尺度が求められねばならなくなる。勿論吾々は多かれ少かれ、意識的無意識的に自分の属する階級又は層の影響を通して見るものである。然しそれだからと云つて「客観的」たり得ないだらうか。「客観的」といふことは「絶対的」とは異なる。藏原惟人の云ふ所をきけば——「……唯問題は、現代に於て如何なる階級の立場に立つことが歴史的にもつとも客観的たり得るかといふことにあるのである。」又吾々は決して主観的な批評を排斥する意志は毛頭ない。むしろ却つて、前者の上に立つた後者を高く価値つける故に、そのドグマを拒否しやうとするのである。

そこからして吾々は、歪曲と誤解とを避けんとすれば當然、その作品の本質的なものと非本質的なものを選び分けなければならぬ。若し何もかもひつくるめて批評するとしたならば、偏つたものを外しながら正鵠を得たかの如く考へてゐると云はれる物笑ひ（そり）を免れないであらう。吾々は常に全面的な、統一的な従つて具體的な批評を心掛けねばならないのである。木を見て森を見ることがを忘れた高木風則に對する松本純一の抗議（前號所載）はそれ故に正しいと云はれるではないだらうか。

2. 零點批評

こゝにこんな例がある。例へば詩誌「北方」の二月終刊號で澁谷榮一とかいふ人が「地方詩誌に就いて」次の如く云つてゐる。——今日發刊されてゐる地方の詩誌を見るに、餘りにその特色の無いことに失望する。……それ程に地方色を失つてゐる地方詩誌の存在價值は果して如何ほどであらうか。私は全然存在理由がないと思ふ。云々。——之と全く同じような問題を「新興詩學の旗の下に」二月號で會田毅といふ人が、對蹠的に解決してゐる。即ち——「詩の地方色は消失する」として「高度に發展した社會（現在の資本主義社會）にあつては……地理的孤立性が消失し……生産の地方色が弱められ……二大階級の存在のみとなり……詩は階級的となる」と云ふのである。そして彼は岡本

潤やアナルキスト農民詩人を攻撃してゐる。だがこの二つの批判は正しいであらうか。僕は何れも正しくないと考へる。何となれば、前者に於ては階級性が隠蔽されて居るのに反し、後者はシャツチョコばつた階級對立の中に、あらゆる層の特殊性を窒息せしめてゐるからである。彼は問題を正しく取上げながら、放棄してしまつたのである。飽くまで現實的な具體的な詩として、プロレタリアの詩の多様性是否定出来ない。勿論從來の如く、階級性を隠蔽する地方色は消失するとしても、それは新しく息吹き返すであらう。それ故、吾々はかゝる批評を零點批評と云ふのである。

3. 默殺の批評か——批評の默殺か

ある作品乃至問題が默殺されたといふ場合に「默殺」も亦鋭い「批評」であり得る。「默殺」されるといふことは作家の最も恐れなければならぬものの一つであるからである。又最も恥づべきものの一つであるからである。作家にとつては大衆が全てである。従つて「あらゆる批評の中で最も重要な批評は大衆の下す批評である」ことは否定されない。大衆が作家に對して「默殺の批評」をなすとき、彼は何に頼らうと浮ぶ瀬はないのである。大衆は決していつも必ずこの態度をとるとは限らない。有害なもの、敵に對しては必ず撲滅の解剖刀を握るのである。然も、一方に「默殺」の武器を握つてゐるのである。しからば作家はどう身の振りつけをしたらいゝのだらうか。——前進か、退却か。こゝに「默殺の批評は」百パーセントに自分の役目を果すわけである。こゝに作家の並ならぬ決意が必要なのである。作家の側からすれば、「批評の默殺」が考へられる。そしてこの事は主として、作家の身の振り方に属するものである。作家も亦、この武器をとる必要があるであらう。たゞ「批評」を一から十まで「默殺」せんとする傾向と戦はねばならないことが注意されるべきである。然らずんば、彼は自らの墓掘人たる資格しかもたぬものとなるであらう。作家に加へられる「批評」と、「批評」に對する彼の態度とは、彼への拍車であり、力強い二つのモメントである。「默殺の批評」か、「批評の默殺」か。解決の鍵はあくまでも次の句が握つてゐるのである。

——あらゆる批評のうちで、最も重要な批評は大衆の下す批評である。作家は充分にこれに堪え得るものに生長しなければならぬ。

—(1)—

附記、うちに引用した人々の下に、敬稱をつけなかつた。然し、これは煩瑣と、つまらぬ感情的なものを避けるがためであつたと諒察してほしい。忽々のうちに書き上げねばならなかつたので意の満たぬ所が隨所にある。之も許して頂きたいと思ふ。——永崎。

『三十年二月二十三日朝』

處女地 三野 混沌

僕はばららのみちないく
 仕事をするとこはさうない
 充分なはれかへすほどの思ひで
 そして僕のみちはまづすぐなんかではない
 僕の執るものば他のどんな者より少かつたとし
 關係したことは大きかつたことを経験した
 生産物でその作り方で種で その擺び方で
 時のとり方で人々の消費方で
 僕はいく
 大きなさくおちのある赤井山腹
 僕からいけば山さなつてくれた
 勿論それでなくさんと考へた
 いつまでも苦心つくしてゐる彼等が
 どうしだらいつが結果するのかと手と物なかへる
 炭水化物の不足だからその補給を施たらいといつたらしい
 彼等の疑問とすることのうさくには
 よく話せばいい
 僕は不足はない
 そしてその結果としては臨く懸例される方がいい
 このやうやく通るだけの露路を入れ

押尾 孝

あゝ僕は

嘘偽不正を呪ふ思ひにみち
 しかも野人のやうに君を訪ねやうとした
 俺はいまそれを耻じなければならぬ
 それはまあなんといい静な生活の美であらう
 君よ
 健であれ
 俺はもう黙つて歸る
 無から實に謁躍する静な力の創造
 謙みは深い 愛もまだ深い
 争闘も深く 遠く正しくあれよ

いま逢はすに歸りゆく俺の心は
 ひと夜を語りあかした日にまじて
 よろこびにみち
 陽を仰いでゆく

吹雪 二篇

福田 将夫

まめぐろ
 ふくよかな風の吹く五月の頃
 かげらう躍るうららかな日に
 脱粒の秋を限りなく味はひながら
 落そうさ

すぐ君の家のひきは見える
 俺は今そこに君を訪ねてゆく

あゝ嘘偽 不正を呪ふ思ひにみち
 俺は賢しい同志と語らうれしさに
 いま君を訪ねてゆく

よく見ればその家の十間前からでも
 家の中の見違ふせる程
 隙子は君の子供のためにさんさんに破かれてゐる
 「ゐるかな」

俺は五六間も前から
 そうと申を覗いて見る

そこには度しい君の愛妻が
 内職の手を休めない
 その傍にれそつて背中に子供を跨がせ
 『お馬どうどう』とはむれ乍ら
 資本論であらう書籍を開いてゐる君の
 いがぐり頭がはつきり見える

俺は暫くぼんやり立つてゐた
 俺は何といつたらいいだらう
 君よ まことそこには

つゝましい愛と美しく破綻のない
 太い生活のきずなを見出したのだ

大きな豆ぐろをいくつもいくつも揃へて
 この雪の期を安らかに休んでくれと
 願つてゐる百姓でした……けれど
 昨夜からの大吹雪に心づくしは
 ふくよかな五月の風が吹く頃まで
 静かにねむつてゐようとした
 豆ぐろは哀れ……吹雪の中に消えてしまつた

秋 小 麥

こゝなら冬の 吹雪でも大丈夫さ
 百姓は

毛の様な芽をうんと細一めんと出した
 そして雪の中に長い間
 限らない夢を辿らうとした小麥です
 百姓もそれを認んでゐた けれど
 昨夜から吹雪に小麥はみんな
 傷つた毛の様な芽を露してしまつた
 百姓は暗くふさいでしまつた
 小麥の芽は吹雪を恐れて寒天をみはつてゐる

一九三〇、一、三、

Y 兄

久保田 ジョウ

すばらしいスマツシグの様な感じの詩を
 思ふ ま書きなぐつて見たい

Y兄

君はよくこう云つたな

蜂の巣

僕らがこう呼ぶ寮舎の四年間

幼稚園の生徒に一番慕はれたのも

君だが

舎監にユダと仇名をつけたのも

君だつたぞ

Y兄

今何處にある

もう春だ 學院の庭は

ミス・エルザが創造の神よを初める頃だ

約束の四月も近づいて今

しみじみ君を懐こんでゐる

一ヶ年の放浪生活に

君も變つたらうな

偉大な收穫もあつたらう

あの鉄線的眼鏡を

感激のひとみに輝やかしたつゝ

君はそれを語つてくれるだらう

四月にはつゝがなくなつてくれ

お互ひに越えてきた途を

かたらし日を歩みつつ

四月一日を待つてゐるぞ

朝の憂鬱

鈴木松琴

空は灰色に閉されて居ても

工場の煙突は真黒い煙を

宛然活動を誇るかの様に膝々と吐いて居た

町裏の路地を急いで居た時

向ふの屠殺場近くに

栗毛の大きな馬が無理矢理引ずられて

打たゝかれて

三步進んでは止まり

二歩進んでは止まり

前脚を突張つて動かない

散々人夫のやつ等を手にすまして居たつけ

きやつだつて生物だ

殺される事は知つて居るべえ

しまいには歩かなく成つて

奴等尻押をして居やかつた

あの馬片ちんばだつたけ

先からそうでもあるめえに

人間なんてあんまり横暴だ

散々使へやがつて

稼げれてつぶすはあんまりひでえや

あゝきやつの新米魔

運命だ如何にも出来ねえ

あたふたけ出した

眞蒼に成つて微かにふるへながらハンドルをしつかとにぎつた

うすぎたいまごから

外をのぞいたら

空は今にも泣き出しそらだつた

意外の沈黙!!! きやつ天國だらう

モーターばかりがうなつて居た

貧困

鈴木木董

昨日も今日も一里もある俺と工場の間

毎日通ふ

雨の日や雪の日はいやだと思ふべよ

あしたのソープに固る俺がの家だ

今日もイサバコかゝへて工場へ行つた

油と 汗とににじんだ

ナツバ服をきかへる時

俺らあくさくてぶんなげべいと思つたが

替がれへので鼻をしれつてきかへた

毎日の仕事 其の日の疲れ

俺だてつまたには一杯の赤酒をほいと思ふべよ

麥畑

佐藤清長

しかし俺は今だ 今じやれい

俺の家は一枚のくされ板へのつかつて居るんじやれい

だから 一杯の赤酒とろじやれいんだ

あらばりにほりかへされた

たんたんたるかうでんちのなから

するどいかんげきをばらましてゐる

むぎ

むぎ

たがやされたむぎのせへめいと

たがやしたひとのせへめいと

どれがたしかならからにもたれやうとするか

おれはのうふじやないんだが

そんなことは知らないんだが

ものすごいふきがきたつて ものすごいあらしかきたつて

びくともないでぐんぐんのびてゆく

ちからづよいむぎのよこづらに

なつかしへしんみのしたしきをおらあわきあがつてくるんだ

そしていつかきつとこの二つのうゑに

おれたちのしらはねばならぬ

べんしよほふつてやつがなによりいゝんだとおもふ

雜 唱

松 村 清

さびしくもあらたまりつる心もちて新嫁に酒をい
ただけりわれは

—友の新婦—

きぞの雨ふりたまりある庭くぼみ陽は春らしもた
ぬしく眺つる

たけなはの春と思ふきのふけふのこのあたたか
さいましめし母は

外の面には子らさやぎつつこまわす音のみきこ
ゆ陽の静かさや

—龍居—

雨なかをひとたかりしつかつぎ來し戸板の上の坑
夫はうごかす

—坑内慘事—

あらはなる雨の脚はも血をふきてふりほそる雨に
ぬれてゐにけり

目掩ひしつづ戸板の上にうごかざる坑夫は哀れ生
命死けけむ

日にけにし目なれつつ來し生業のおぞましくなれ
りあわれひやけく

雜 詠

磯 上 錦 波

師に逢ひて語るうれしき幼なわれ胸につかへて言
葉いでざり

かすかなる物の音にも耳たてて立ちつ坐りつ父を
待つかも

なやみをばとふ人々になにげなく笑ひまぎらす胸
のくるしさ

母を憶ふ

下 倉 勢 津 子

笑みもちてもの云ひ給ふたらちねのおもかげしぬ
び香たきぬるも

面やつれそれとは見えてちちのみの父の姿のあわ
れさびしき

世の常のならわしに來しこのわれの所帯染みたる
見れば寂しき

靜 寒

市 川 獨 葉

夜ふけて靜もる町をわがいく足音のみぞ訝えか
へりたる

じりじりとたばこのやにが羅宇とはる音をきいて
る自分ひとりだ

病床記

大 里 彌 生

眞夜半を何ともなしに思ひ侘び思ひあまりて髪を
とかしぬ

病む床にかがみ取り出し右頬の泣きはくろなど珍
らしくみる

ねつづけにねむりしあどのほろにがき心にのこる
いろ／＼のこと

痛む齒を痛む頭を崩れたる心を更に持てあます夜
きのふまで持ちこたへたるはりつめたころも今
は衰へにけり

枕もとの六枚びやうぶのそれ／＼の墨繪の色もな
つかしくみる

友の呉れしふらんす人形のスカートの眼玉の色の
白い冷めたさ

寢あきたる眼にしみ／＼と天井の汚點を數へる眞
夜中の二時

一 歌

松 崎 富 多 美

ひらきゆく眞白き頁のなつかしさ君が買ひ來し文
學の本

こゝろ

佐 藤 清 長

なにやらむ心とまぬ一日ただ約束破る友の身想ひ
て

占を知る身にあらねどわけのなきことにこだは
る性の悲しも

平澤雪哉
若葉にけさ降りし霜ぬれてをり
初雪や名もなき墓に二三寸

丹野晴夫
麥ふみてふと立ちあふ朝の月
田雲雀の聲ふるいたる霜の朝
霜の朝坂行く馬の息白し
木枯しや夜更けて通る下駄の音

磯上錦波
稻刈りや戻り路くれて鎌の月
刈り後やはりあいなしにとぶいなご
柿の實に夕日照り映え秋深し
竹の雪散るたびに雀なく

渡邊いわほ
着かざりて師匠を訪ふや針供養
野の梅を折りて妹にあたへけり
風に臥す口にかんの合ひにけり

吉野かほる
うぐひすに今一聲と歩をとどむ
妹の心づくしや梅一枝
一雨にカラリと晴れて宵月夜

一寸した空想

吉野かほる

暖たかくなつたとは云ひまだ三月の半ば一暮れ易い日は城山の鐘の音とともにとつぷりと夜の幕に覆はれてしまつた。私は一日の勞働より解放されてはつとした氣輕な氣分に包まれて家路を辿つてゐた。早く歸らう—なにはなしに私は樂しきもなく華やかでもない家に歸ることが心地よかつた。單調な家—平凡な家—それでゐて家はなつかましい。—フット私は若い夫婦のことを思ひ浮べた。樂しいかしの家。家に歸る事が—妻の顔を見ることが—そして微笑と、甘い肉聲とによつて疲れ切つた心神の慰籍を—待ち遠しい事だらうと思つた。—と今度は今自分の妻のことで親たちが一心になつてあの娘はいゝぞ裁縫は出来るし容貌だつて笑はれはしないし氣立はよいし—などききもしない事までを話して説き進めてゐる事が思ひ出された。もう二十四五にもなれば早くもないぞと云つた。—むつぷりとした父の顔—早いもんか妾などは叔父さんが十九の年に十六で嫁になつたと云つた叔母の顔—うん早くもらつてもはんと年と云つた妾がこまる朝と夜の水事がこたへてな—と云つた母の事など—いつその事もうかかな、そうしたらあの單調な家も—俺の心も少しは華やかになる事だらう—お歸んなさい水々しく結つた島田が俺の足音で微笑と一緒にとびつくだらう。

その頃の歌人群

松村清

線香花火的明滅、そこに時代的なかび臭い何かを感じる。又甘つたるい回顧的な樂な眼がひらくし、かしあまりに線香花火的明滅性をもつてゐた、磐城平を中心とした歌人群、詩人群、特に歌人群を各誌を擧げて羅列的に筆にあげて見やう。

代表的な人々として、柿沼一紅、篠塚因花の故人、高久晚霞先生、須藤貞夫先生、佐々木顯氏等をあげ得る外は各誌の發行當時だけの所謂線香花火的存在に過ぎない。

平を中心として發刊された雑誌、オアシス、ブラチナ、ビロード、野の泉、みみづく、生活と文藝等を主にして粗雑ながら書いてゆく。

(1) オアシス

大正六年春(?)篠塚因花、馬場林鳥、柿沼一紅外數氏によつて平陽詩社が結社され、新聞紙型の、「オアシス」が創刊された。同人の總てが詩に短歌に共同陣を張つてゐた、短歌に於て篠塚因花、柿沼一紅が特に光つてゐた。前者のその獨創的な詠風は同誌の白眉であつた。誌友の秋川繁(後透水と改め)が炭坑の獨特な境地を短歌におさめてゐた。同人の上田郁美、吉田顯郎、鈴木歌津路、馬場林鳥、の諸氏が揃つて短歌を發表してゐたことは現在から觀ると一寸奇觀である。その他の誌友に佐々木顯、山崎美津子、戸村孝生、會津歌壇の雄渡部朝村君等がゐた。同誌は懸賞短歌を募集してゐた同人誌のこの企ては現在では鼻もものならぬものながら、その當時は一寸受けたものだつた。

三野混沌氏も何か書いたやう記憶する。混沌氏は當時、吉野義也の本姓名で秀才文壇へ異常な力作を發表してゐた。馬場君が「若きカーペンターを訪ふ」を書いた。そして僕は誌上で混沌さんを知つた。「オアシス」の同人誌友が中央文學文章世界その他の雑誌の懸賞歌、俳句等へ投書してゐた。

「オアシス」は三月號から雑誌型に改つてそのまゝ休刊してつた。當時いはらき新聞の木星欄が

横瀬夜雨氏によつて、B欄が山村暮鳥氏によつて選せられてゐた。B欄に篠塚君が作品を送つてゐた僕と柿沼は一週間歌稿を木星へ送つてゐた。暮鳥さんによつて「苦惱者」か生れ歌欄に佐々木顯氏の作歌が見えた。柿沼一紅は時々いばらきに短篇を双葉蝶一のペンネームで發表してゐた。篠塚君は北海道の「北潮」に長篇創作を發表してゐた。

その他「オアシス」によらず新進歌人として伊東山三郎君が福島民友歌欄（佐藤嘲花選）に毎日清新なその詠風で發表してゐた。非常に多作家で、磯貝彌氏らと交つてゐたもう十數年以上も消息をきいてゐない。

以上に挙げた諸氏の作品を載せたのが「オアシス」がどうしても手に入らない。おぼろげながらの記憶から書いた。「オアシス」同人の馬場君を除く他の同人は現在どうしてゐられるか面識こそないがなつかしい氣がする。

(2) プラチナ

大正九年七月に創刊號を出した。阿部因鳥、大原紫雨、室橋宵夢、柿沼一紅その他の同人によつて篠塚君が編輯顧問格で——篠塚君はこの頃から詩に轉向してゐた。女へ送るの詩。母はひとりでない。半面の自傳、散文詩等を發表した。暮鳥さんも二號へ詩を寄せられてゐた。同人も誌友も皆詩と歌と両面の才を蓄つてゐた。斯く云ふ僕もさうだつた、なせか知らないがそう云ふ現象がその頃の常套傾向であつたやうだ。

しみじみと暮れし夕べの悲しさを鵲の目に見るさみしき心
 額寶りのでな眠れる幼な子の陽にそやけたる赤黒き顔
 あたふたと眺せよる小兒可愛ゆしと泣くほど抱いて叱られしか
 かわゆさにキスなしたき心地せとわれになし得ぬ病き心
 朝あけのこの高原の静けさよ汽車のひびきの遠くきこゆる
 泥り路にさら照り映ゆる街燈の光りさやけく夜は更けにけり
 うちは手に寶の子の上に座し居れば青田の上をすべる又鐘
 とし並の煙もなし得ずひと日われうすらくまに暮れこけるかな

室橋宵夢
 阿部因鳥
 大原紫雨
 染山貞子
 林露秋
 秋川透木

うつくしき君を得たしと思はれとなでかくばかり我れはさみしき
 指しけれと歸るさ得むそ途の螢を待ちわぶるやまふ人あり
 あかとき淡き兒の夢おとなへと蚊帳に吊るせし螢かごかな
 ものごとになづくわれの性いまは身につまさる話ききけり
 うすらひをあゆめるこころの朝け女の肉繋れたましくきこゆ

高久晚霞
 松村冷夢

その他佐藤馨風、鈴木仙風、石川燈村、石川星花、中野十六伯の諸氏がゐた。中野十六伯は英雄君で林露秋は邑光君のやうな氣がする。

「プラチナ」は二號で無届出版のかどで罰金貳拾圓也を科せられ、そのまゝ休刊してつた。

と同時に内郷村白水から鈴木紫蘭が出した「青柳」も同じ運命のもとに消滅した「青柳」は見るべく語るべくあまりに貧弱な内容だ。その後「華柳」と改題非賣品で出したが遂なものにならずに終つた鈴木紫蘭、秋川繁共僕と小學同級である。鈴木はその後ちつとも消息がない。

「プラチナ」創刊當時から柿沼と秋川と僕の三人で短歌研究の同覽誌を作り、盛んに勉強した。「何時も俺は歌學者にされて了ふ、君ら二人にかかつては」と僕と秋川の強情に柿沼は惱まされてゐた。

(3) 苦惱者と生活と文藝と

山村暮鳥さん大關五郎氏等によつて苦惱者が水戸から創刊された。大正七年十一月號に高久先生の送り火八首、十一人集に佐々木顯、柿沼一紅及び僕と歌を送つてゐる。

兒の螢を迎へるために菓子を買ひ花を買ひたる悲しき心
 送り火のあるかなかに在りし日のわが兒の癖をおもふなりけり
 笑ひつつ猿の踊りを見てゐたる人な惜めり秋風のなか
 深山に人の命をたすけたる猿の話を兒にきかせたり
 秋の夜に夢遊病者はふしよりあはれいいたびその母あはれ
 狂人の君をみつめてしばらくは何んにもいはれぬ母あはれ
 とづかなる朝の景色をみてあれば榮を賣る女通りけるかも
 一群れの雀飛びけり鐵砲の音の響きし刹那の空を
 落し水がそかなる音に流るるなひとりききんしまひるなりけり

晚霞
 佐々木
 松村
 柿沼

この頃暮鳥さんは可成り重態な病床にあられたやうだ。雜感に「咯血、血の迸り、血の塊、ぐつたりつかれて床の上に横はつてゐるとだんだん意識が明晰になつてくる。ちようどその時、障子の小さなやぶれから見えた蒼天のやうに——そのそらはよかつた。」と

●江尻忠平、鈴木寛一、矢吹長貴の同人で、平窪の居村から、「生活と文藝」が發行された。九號まで出たやうだ。大正十四年の一月號に、柿沼、江尻、鈴木、野木それに僕らの詠草がのつてゐる。それ以前のものは見ないでしまつた。鈴木江尻の兩君は牧水派である。

一 紅

松 村

野木金太郎

鈴木寛一

江尻忠平

ひだまりに生命死にける蠅見つものいのちを寂しめりけり
夕まけて今日も熱づくわが命しふれき風邪に細りけるかも
つきつめて思ひば昔に悔多しひし室にひそまりてゐる
つきつめて思ふかづ／＼こゝろに云はふ機なき降をたもてり
思ひ懐みて時をひさしくいれすありそがひの弟は夢なきするも
弟のゆめなく聲の夜見ぬちにしゆびかにきこゆ病母もめざめつ
病母のさびしき聲をききめつゆめなく弟をわがゆりおこす
見仰ぎつづのぼりいゆけば木間がくり山の高みを灯のくさる見ゆ
山宿の目さめよろしも昔戸のへに覚の水のおつる音きこゆ
初醉は何かうれしむいたつらにからだをゆりて歩みて見たし
思ふことも憫むこともみな無爲なりわが來し路をふりかへり見る
おどろしく海鳴りきこゆこの夜更け心重たく寢床とるかも
この宵の雨ぬくれば二つ三つ蠅下りてなり疊の上に
夕焼けのこの竹やぶに來てさわぐ雀の聲はみなふくみ聲

鈴木寛一、江尻忠平の二君とも健在らしい。それぞれ職業の相違から遂、疎遠してだん／＼遠のいてゆく幅が廣くなつてゆくやうだ。

「生活と文藝は「みみづく」乃至「野の泉」の次へ入るべき年次にあるが、原稿の都合でここへ入れた——
……(續く)……

幸福への意志

佐藤 清 長

私はいつからか考へてゐたとしてこれを書いて見ました。
随分長くなつたと思ふのです、で序曲などと云ふと大それたものになる様ですが、つまり全體の形式か二人の會話でまとめました。ただ諸氏の反論を待ちます。それは二月十七日より

序 曲

「暗闇たる宇宙を遊び廻つてゐる汝が、汝の心をはつきり掴んだことがあるか！ 恐らくないであらう。さかしい智慧を振り絞つて汝は汝の心をいつでも偽はつてきたであらう。」

「いゝえ偽はつて來たことはありません。私は私が生きてやうとする力に頼つて生きて來たのです。——莫迦め！ 生きる力が心でないと云ふのか、今日迄の生き方に對しての汝が、汝の生きる力にどれだけの幸福を味はつてきたと思ふのだ。」

「私は幸福を希はぬことはありません。併し私は貴方が仰言る様な「幸福」を未だ感じたことがないのです。幸福とは悲しみや苦しみをのみ知る事ではない筈です。私は私の生き續けてきた今日迄をどの一つだつて忘れてはゐません。それ丈私は幸福に執着があるのです。それを掴まふとして私

は生きてゐるのです。

——(聲を低めて) 偽善者、汝は何を謂ふのだ。汝は汝の言葉を複雑にして俺を迷はそうとするのか！ 生きる意志が何よりも人間の幸福に違ひないのだなを以て汝は幸福を幸福とするのか？ 汝が幸福に執着を感じて生きて行くのを凝と凝視してやらう。

……(地に伏して最も小さな聲で)

「あゝあ、私は一應どうすればよいのでしょうか。」

「汝は俺に言はれて氣が付く迄でもなからう、汝の猿智慧はその事を常に考へて來たはずだ。俺は汝の醜ひ體から、汝の心を呼醒しに來たのだ、今汝が心に求むる事を俺に誓つて、汝の偽善的な假面を剥いでしまひ。さすればこそ汝の混迷な行動が人間同志の争から抜けられるであらう。」

「私はあなたが言ふ言葉が分らなくなつてしまひました。私は私の持つちがはぐな氣持を一ツに纏めたいのです。そしてあなたが仰言る言葉を知りたいのです。いゝや知ねばならなくなつたのです——汝は未だ迷つてゐるのか、その過去をあまりに汝は恐れてゐるのだらう。人間の持つ感傷的なさごちなさを捨てない限りその煩悶からは脱離出來

ないものだ。俺は汝の様に苦しみをも嬉しさを
も知らなくて済むものだ。それ丈に汝の様に物事
を直截出来ない者達に俺が教へてゐるのだ、假令
ば汝が言ふ如く幸福にさいなまれる小さな人間の
意志が、悲しみや、苦しみの爲に自屈してゐるの
を呼戻してやる故にだよ。

——様それは偽です、あなたは私に偽を謂ふの
です。先程仰言言葉に（暗黙たる宇宙を遊び廻
つてゐると言ひました）暗黙たる宇宙を遊び廻ら
なければならぬ人間でありましたなら、一ツの物
事を直截出来ないのは當然でないでしょうか？

——（嘲笑を浮べて）それが汝の猿智慧と云ふのだ。
一ツの物事にさへ直截出来ない汝が光明であるべ
き宇宙を、私が宇宙の凡ては光明であると教へた
とて汝にはその言葉を解き切れるものではない。
幸ひに汝がそのことを俺に尋ね様とするのは汝の
意志が生きたるの逆逆を持つてゐるのを俺に汲み取れ
るよ。

——私は生きる爲に反逆と云ふ言葉を用ゐたくはな
い、私は何も知らないものでした。而し私は人間
の性丈を知りたいと思ひます。私の望みは空想や
理論ではないのです。眞實に人間としての私しを

求めてゐるのです。

——お、お前は夢を抱いてゐるな

……

……夢、夢、あゝ夢は見飽きてゐます。

——狂つたか！ 汝は狂つてゐるな、夢は眠る時ば
かり見るものぢやないよ、人間は誰れでも夢の衣
を顔に着てゐるものだ、そして堪えず口を動かして
ゐるものだ。それあれを見えよくあれを見え

……（恐怖に戦く顔をもたげて）

……あつ、あれは私の友です。

——汝の眼に何が映る 最つとよく視よ

……お、私の妻もゐます（……の顔次第に若ばて来る）

——分つたか、お前はあれをどうする心算だ。

……私の知らぬことです。

——その口が夢だ！ お前は私に尋ねるのを恐れて
ゐるのだらう。それ益々お前の顔が蒼くなるは

……（上つた言葉で）あなたは私を苦しめ様として
私の苦しみを喜んで居るのですね。

——俺は先が見える、それよりも早くあれを見ろ！！

お前の友がお前の妻を抱擁してゐるぞ、お前の妻
は彼がするまゝにしてゐるぢやないか。お、後か

ら犬が来るは。

……私は氣が狂いそうです。いつたいどうすればい

ゝのです。

——静かにせい、お、彼等は人間の好きな警察へ連
れて行かれた。

……（どもり作ら）あゝあ私は先が見えない、私はも
う歩けない、歸る事も出来ないのです。あなたの

姿も見えなくなつてしまいました、どうぞ私の歩
ける場所迄連れていつて下さい。

——お前は明るみの道へ出て歩けないよ。

……なぜ なぜです

……なぜ なぜです

——（間）——

——（間）——

——それ眞上を見ろ、雲があんなに動いてゐるのだ
雲が希望を募ひつゝ毎日歩んでゐるのだ、併しあ
まり廣すぎる希望に毎日悩み狂つてゐるのだよ。

人間と云ふ者は雲に似て、目的のない目的に悩み
續けてゐるものだ！、地上に匍へ廻つて人間が雲
を見上げた時、はつきり雲を凝視められないと等

しく、雲の質が人間の質と、つまり人間の心と同
等しいものなのだ。意表外から意表外を生んで

行くのは人間同志の性が、たつた一ツしかない生
と死と云ふこの存在を恐れてゐるに外ならないの

だ。神は人間達の謂ふ如く、無形な存在でもなく
亦有形な存在でもあり得ない。ただ神は人間達の

心の奥深く密んで居るものに過ぎないのだよ。俺
はお前の様に惨めな心を抱く者には一番憎しみを
感ずるのだ、——（間）——

——然し俺はもう一度謂はう、それは雲の形をだ
よ空の何處かに眞黒い雲の塊りがこびり着いて居る

時、そこには地上を歩む多くの人間が屹度風を連
想するであらう、そして色々な仕事をひかへるに

違ひない。俺はその時雲に、「降らせよ」と何の
躊躇もなく言ふのだ。破壊すべきものは破壊して

しまふ、そしてその次には毀れない確かなものを
築きあげるのだよ、お前の力がお前の力を征服さ

してこそ、始めてお前を掴み切れる時になれるの
だ、なまじ明るみの道に出てもお前の力が足り

ない場合は、それこそ苦しみを重ねるばかりに終
るのだよ、明るみに出る前に、お前はよく考へ

て見よ。

（間）……考へなまめ生々とし顔をたげはつきりとし

た口調で

……私は分りました。私は私の意志に生きて行きた
いと思ひます。そして私の凡てを——様に申したい

と思ひます。

——（静かに）そうか、然し私はお前が云ふ言葉は分

つてゐるのだよ、お前の力が、お前を育てる事は一番尊いことなのだ、それが人間として與へられた最大の幸福の意志であるのだ。

私は黙々と苦惱の支持者でありました、誰れも私を知つてくれる人がなかつたのです。親しい妻さい私を裏切つたのです、然し私は今、そうです唯今からは誰がゐなくとも、私は私の伴侶者を求めません。

―待て、待てお前は感情に躍つて來たな、一方の理屈を片つけて一方の道理を忘てはいけないよ。いゝえ私はそれが一番容易な事と思はれます。なまじ私が過去を振り向こうとするのは、私の力を、私の意志を屈らしてしまふ丈だと思ひます。

（三の顔をまじく凝視める）

―（喘ぐへつ）なせ私を凝視めるのです

―可愛想な男よ、偽善を重ね様とする男だからよ。それが私の歩み迷つた路ですもの。

―ではなせ元の道に歸つて歩み出さないのか。私が歸る道はないはずだ。私はこのまゝの道を歩み切つてしまふ心算です。

―恐ろしいことだよ。人間達が利慾の念に離れないでみもだいでゐるのとお前が歩まふとする道

に何等變りはないのだ。お前が望む物の中に階級的な二つの質を汲み入れてはならない。罪ある者が罪ある者を縛らうとしても、それは醜い自衛の宣告に終るのみしかならない。お前が罪や罰を裁くのはお前が望む幸福の合致に浸しんでからすることだよ。

―しきりに考へてゐる、

―考へるのはよい事である。併し考へに囚はれてはいけないのだよ、考へ過ぎるのはお前の量はいえや人間達のくだらない悪智慧を伸びさすにしか過ぎないのだよ、夫れ故に智慧のある暇な人間達は己れの罪を罪のない他人に着せて喜こんでゐるのだ。お前がそうであるのだ、自分の罪を意識して親しい者の罪を赦さずに苦しんでゐるのだ。罪はお互が赦しあつてこそ何等の苦しみや、悲しみも生れず、明るい幸福に生きられるものだ。幸福を求むるのは、罪や罰を理解しあはねば何等の意義が含まれないものだ。さあ早く行くが、お前達が道を歩み始めたときに、路に向つたとき、心持を育んで確かり歩み續けて行きなさい。

（幕）

創作 木馬に乗る男

（三）

松本純一

第一信

5

ここは那須野温泉の宿の一室です。

まあちやん、あまり突然で、それにだまつてきて了つたこと等、せめないで下さいね。

あなたと銀座をあるいたあの日から二日目です。急に話しが纏つてふるさとへ遊びにゆく様になつたので、お知らせする機会もありませんでした。それにT町に着いた翌日はもう那須へくる様ないそがしい目に會つたので、まだ頭がぼんやりして

ます。那須！いい所ですね、黒磯から自動車で雅趣に富んだ山道をドライブした時などは、あなたが僕のそばに居なかつた事が、どんなに物足らなかつたか知りませんよ。ネデまわしの様に登つてゆくたびに、大きな山が頭を出してみたり、胸はだけになつてみたり、山だけがもつてゐる七月の重たげな色どりが、くり色の車體にくるまつてくるなど、僕がもつとデリケートな觀察力を貯へてゐたら、どんなにあなたをよこばす事が出来たでせう。僕は、野依の叔母たちときたのです。

男の子二人と、まあちやんと同じ齡のしづ子といふ女の子と三人です、もつと書きたいのですが、疲れてますから、次便でお話ししませう。猶、ご返事はいりません。ここは大變不便なんですから。

登志夫記

第二信

いまお湯からあがつたばかりです。

僕らは、高臺へ室を陣どつたので、長い梯子段のあがり、さがりに空腹を感じる位です。

湯ぶねは石張り、底などはまるで輕石のやうです。

かなり高熱なのはいる前にしやくしで頭だけをかぶるんです。

そんな譯でいまでは三百杯ぐらひかぶつてゐますよ。

僕にはなによりあの湯の匂ひが好きですね。腐つた玉子の匂ひに軽い酸味を加へたあの氣持です。殆んど硫黄分で氣のせいか、肌が赤黒くなつた様です。高臺なので宵闇など早く追つてくる様な氣がします。

一番きかない男の子がどつからか花火を買つてきて、おつとりした庭のいぶきをおどおとした華やかさでゆすぶりました。

椽がはで足をぶらぶらさせながらそんな風景を樂しめるいまの僕です。

宿のうしろには、だまつて胡塵をかいてゐる茶臼の顔が、黒いひげをしごいてゐる老人の様に見えます。

蚊も蠅もゐません、こんな所に長く住んでゐたら、人間の氣持をかへるかも知れませんほど静かなんです。

登志夫記

第三信

きのふ、六時に起されて殺生石から、すつと奥にある大丸温泉へゆきました。

殺生石は語りませんが、芭蕉が腰をおろしてなにかひねつたのもわすれて了ひました。

大丸温泉は湯本から約一里ちよつとです。

その途中に所謂那須野ヶ原といふ龐大な曠原があります。

僕は一行よりおくれてこの那須野ヶ原の掌に思ふ存分親しめることができました。

あつちこつちに可愛い仔馬が裸であそんでいます。

通りすがりに、大きな樹林があつて、手にとる様にいろんな鳥類がゐます、なんでも禁獵區域だそうですが、僕が再び宿へもどつてトリモチを用意したなんて、あまりきかせたくない話です。

まあちゃん、もうすぐあなたに會ふことができますでせう。

登志夫記

6

私と彼女の間に展かれた、最も清かるべき戀愛は、彼女の卒業間ぎわまで續いた。

そうした長い期間に於ける彼女への接觸が私の感情を、次第に新しい變化に導いてゐたことを近頃うつすらと感じる様になつた。

それは、聖教徒の唇にうたはせる愛の博捨なく、愛の専有だ。

私と彼女の絶對境地だ。

彼女の精神に愛撫された肉體の専有だ。

そうした變化が、彼女のこれから多端なるべき問題の背後にかくれて、私のうす暗い氣持を惱まし初めたのである。

このどうにもならない變化をみるにつけ、溝呂木の氣樂な戀の仕方をうらやめた。

私の眼の前には依然として、町子の清らかな總

マーガレットに似た白い花をはんでは、首をふつて空へ放つたりしてゐるこの中でまあちゃんの聲をきいたり、輝いた瞳をみることでできたと思ひました。

大丸温泉は、岩間を流れてゐる湯川です。

ですからゆつくりした氣持は味ふことができません。女のひとが岩にもたれて、湯づかつてゐましたがあまりいい感じではありませんでした。

登志夫記

第四信

赤さんばが虹のやうに飛び交つてゐます。

あす、那須を引上げます。

見納めに、この宿から近い高雄温泉と紅葉の瀧を名所らしくみてきましたが、もどりがけに妙な雲層に出會つて、おどかされました。

こわごわうしろを振返つたら、はつきりと那須岳が、たばこの煙りみたいな硫氣を噴いてゐました。

ひるすぎでしたか、しづ子に誘はれて湖月園といふ一寸とした遊園地へゆきましたが、なんの設備もないのでほんやりと自慢だといふだんごばかりがはかゆきました。

べてが近づいてゐる。

彼女のあの輝いた瞳がうるんでゐない。

そうだ、私の戀の素顔はそこに純情を誇つてゐたのではないか

四月の中ば頃、彼女から手紙を受取つた。

それには無事に卒業したからよろこんで下さいこんどの第一日曜にはお訪ねします。と言つたことが、うれしそうに最かれてあつた。

私のところがどつかで、静かなさもしびをともした。

私は明るくはにかんだのだ。

てがみは勢よく抽出へ投げこまれた。

その日に彼女は訪れた。

遠慮勝ちな話がはづんで、私はよろこばしく彼女の顔をみることができた。

が、私は妙な發見をした。

彼女が話の合間にちらつとみせる大人びた女のゆとりである。

處女的な或る固さからくる緊張ではない。

なにかしら、感情的な操作を失つて理性の物靜かなポーズである。私は戀人とのみ物語る甘やかな

なうたげに黙々とした良心を呼びよどした。

そして、乾いた微笑だけで、彼女の話を迎へた併しきかねばならぬことがひとつあつた。

私は固くなつたまま素直に訊ねた。

『ねまあちゃん、この間あなたのお父さんがきた折りに——うちでも學校を出たらすぐ、にやる積りです——こうゆうことをきいたのです。』

僕あ別にどうか言ふ譯ぢやないですが、あなたの氣持だけききたかつたのです。』

そう言切つた自分のころは、町子の返事をきくまいとあせつてゐた。町子は多少蒼褪めてますああの理性的な分子をふやしていつた。

大きな密雲が浮んで、それがだんだん薄消えてそこに町子の顔がひろがつてゐた。

『そんなこと、あたし知りませんわ、ただいつかなされなければならぬことが、あたし、いまからどうしやうとも思へません。ですから別にあたしとしての氣持なんぞありません。』

私はもう耐へられなかつた。——このいまわしい扉を押開いて——

「——ごめんなさい、僕の頭はどうかしてゐるのだ」

町子はなだめる様に……然し熱のない冷やかさで『登志夫さん、解つてますわ、あたし、解つてますわ』

私はこうした消化できない——それでも彼女への信條が、またそこに明るい氣分を見出した。

そうした折に、俄かに階下が賑やかになつてきき馴れた聲さした。間もなくさと子が體格のいいからだを洋服に包んであがつてきた。

『まあ、友田さんおいででしたの』

彼女らは卒業した世界で挨拶してゐた。

日曜なので、兄の順三が子供らを連れてきたのだそれから私達は、赤阪の葵館でチャトリアンの

ベルスをみた。ソリに乗つてきたユダヤ人デュラスが唱へた——おそろくはわが仇いはん、われかれに勝てりど、おやらくはわが敵わがうごかざるによりて喜ばん——のことが頭へこびりついてならなかつた。

七時近く、町子を澁谷まで送つたが、これが私と彼女の間にいれどられたプラトニック・ラヴの終局であらうとは知る由もない私であつた。

「つづく」

雑記

一ツ一ツの意志をはつきり積みつけ様とする迄は確かに困難な事に違ひない。ともすれば偏むきかゝる人間の小さな我執が、何等かの形に支配され易いのは、つまり一ツの意志に依るところが多いんだと思ふ。それは意志を支配するのではなく、意志に支配されてしまふからであるまいか。茲に於て一九三〇年誌の基礎がこの間違つた感情の爲に第二號を送り出したつた事に今更深く恥ぢてゐる。

がつちりと組合つて僕は歩もうとして歩み出したのである。併しそれは未開の地に何等の武器をも持たずに進もうとした猪武者の様な態度だつたと思ふ。茲に到つて全く汗顔極まりなしと思ひた。感考一月退歩か？ 進歩か？ 僕の達の考へは、つきにつきて、決然と振ひなつた。そして五ツの身體を無言の裡に合致さしたです。尊い信條の下に諸君の掌に送る第三號!!! それこそ何より僕達の勞苦が報へられる唯一の喜びであらねばならぬと思ふ。

茲に第三號の飛脚が目覚ましい力に自然の冬眠期？を破るに先立ちて、送り出すびら、とはねかへる一ツの言葉です。

——第二輯の編輯を終へるとすぐ相場が病を得て仆れて仕舞つた。まあだ療えずに居る。

それで此度の編輯は不なれな僕が顔を出してしまつた。随分氣づかれのなれるものだ。幸ひに御叱正を得ば是れに過ぎず。

——賣名的な、なぞと外を向かすに下さい。色々と同入達のことに就いて尋ねられる度にまごつくのです。一々御返事申上ぐるより紙上に發表して責を明らかに致します。

第二輯より佐川氏が入つて都合六人の花東です

相場 勝雄
吉野 運之助
佐川 忠衛
鈴木 武夫
鈴木 忠吉
佐藤 清長

——種々な意味で誤解をまねぐこと程苦しいものはない、一九三〇年は無言者ばかりではない然と皆んな荒けつりの者であることだけ告げてなかう。故にそこに生れる一ツの作品には全然無價値なものばかりではないのだ、眞實に生活にくたびれた飾り氣のない姿なのである。

階級的意識にめざめ切れざる地方のインテリゲンチヤが弄ぶ危なつかしい心は寸毫も持つて居ない事は、屹度第四輯の編輯を期待していただきたい。次に発行日は毎月十五日と變更す。

清 長

◆投書規定◆

- 一、一般投稿歡迎
- 二、會員は文藝誌發行支持費として一月參拾錢を原稿と同時に納入のこと
- 三、原稿は可成一篇を望む
但し和歌 俳句は數首も可
隨筆 感想等々
- 四、内容 詩 和歌 俳句 小説 戯 評論
- 五、宛名平町立町四十五
- 六、締切毎月十日限り 住所姓名を明記のこと
- 七、編輯は編輯部に一任されたし

………以上………

昭和五年三月十五日印刷納本
昭和五年三月二十日發行

【頒賃金拾錢】

編輯 人 相 場 度 一 郎

印刷所 二葉印刷所

福島縣石城郡平町仲町二番地
印刷所 二葉印刷所
福島縣石城郡平町立町四十五番地

發行所 一九三〇年 社

常にウマザル努力を以つて
地方の欲求を果してゐる
マルトモ書店を
御記憶下さいませ。

店書モトルマ

迅速 丁寧

この唯一の信條にこそ
私の店は皆機を
御迎ひ致します。

二葉印刷所

電話三〇二番

平活版所